2024年度　JICA九州

高校生国際協力実体験プログラム

報告書

目　　次

1. はじめに 1

2. 高校生国際協力実体験プログラム報告

【第１日目：７月25日（木）】

開 会 式 3
学校紹介・アイスブレイク 4
国際理解ワークショップ BafaBafa 6
国際協力模擬体験 8
JICA 研修員との交流会 10

【第２日目：７月26日（金）】

国際協力模擬体験　グループ発表 12
全体振り返り 14
閉 会 式 16

【事後学習】

事後学習実践事例 18

3. 添付資料

参加校一覧 21
スタッフ一覧 22
募集要項 23
応募用紙 27
アンケート集計結果 29

1．はじめに

《 事業の概要 》

JICA 九州は 1996 年より、九州の高校生を対象に開発途上国への理解を深めることを目的とした「高校生国際協力実体験プログラム」を実施しており、今年で第 28 回目を迎えた。これまで、多くの高校生が国際協力について学び、開発途上国の課題や国際社会との関わりを感じる機会を提供してきた。本年度は九州 7 県 30 校からの応募があり、書類選考を経て、次の 7 校が選ばれ、計 35 名（生徒 28 名、教員 7 名）が本プログラムに参加した。

〈 2024 年度参加校 〉

・福岡県　福岡県立　久留米高等学校

・佐賀県　佐賀龍谷学園　龍谷中学校・高等学校

・長崎県　長崎南山学園　長崎南山中学校・高等学校

・熊本県　尚絅学園　尚絅中学校・尚絅高等学校

・大分県　大分県立　大分舞鶴高等学校

・宮崎県　宮崎県立　宮崎大宮高等学校

・鹿児島県　原田学園　鹿児島情報高等学校

参加生徒 28 名の学年内訳は、1 年生 8 名、2 年生 13 名、3 年生 7 名だった。各学年から幅広く参加者が集まり、異なる学校間や学年間で互いに意見を交わしながら学びを深めることもこのプログラムの特色のひとつとなっている。

《 プログラム内容 》

事前学習では、各県の国際協力推進員が参加校を訪問し、プログラムの目的や意義、JICA の紹介や国際協力の役割について説明した。また、国際協力模擬体験のアクティビティや異文化交流に向けて、事前に準備すべき事項や課題を提示することで、当日の学びを深める工夫が行われた。

プログラム初日は、参加者同士の親睦を深め、国際協力についての理解を深めるためのアクティビティが以下のとおり行われた。

■ 第 1 日目：7 月 25 日 (木)

・開会式
・学校紹介・アイスブレイク
・国際理解ワークショップ BafaBafa
・国際協力模擬体験
・JICA 研修員との交流会

プログラム 2 日目は、前日の学びを発展させ、グループ活動を通じて国際協力の実践的な理解を深めた。

■ 第 2 日目：7 月 26 日 (金)

・国際協力模擬体験グループ発表
・全体振り返り
・閉会式

2 日間にわたるプログラムを通じて、参加生徒は、異文化理解の重要性や、国際協力の現場で直面する具体的な課題について深く学んだ。プログラムでは、ワークショップやグループディスカッションが行われ、参加者同士が活発に意見を交わしながら、多様な価値観や考え方に触れる機会を得た。また、実際に国際協力に携わる JICA 職員や国際協力推進員など現場経験者からの話を聞くことで、国際社会が抱える課題の多様性やその背景について、より深く理解することができた。

こうした経験を通じて、参加生徒は国際的な視野を広げるだけでなく、異文化理解を深めることで、地域社会に貢献する視点を養うことができた。このプログラムが、参加生徒にとって国際協力や多文化共生への関心を高め、将来的に主体的に行動するきっかけとなることが期待される。

2．高校生国際協力実体験プログラム報告

第１日目

7 月 25 日

《 開会式 》

（1）ねらい

・開会式を通じて、プログラムの目的や意義を明確にし、参加者の意識を高め、主体的な学びを促す。

・国際協力の重要性についての理解を深め、プログラムに対する動機付けを行う。

（2）概要

「高校生国際協力実体験プログラム 2024」を開催するにあたり、JICA 九州・吉成安恵所長が開会の挨拶を行った。本プログラムの意義を説明した後、プログラムで得た気づきや学びを深めてほしいという参加生徒への期待を述べた。開会挨拶後、2 日間を共に過ごすスタッフである九州各県の国際協力推進員 7 名と NPO 九州海外協力協会職員 4 名が挨拶を行った。この開会式を通じて、参加生徒はプログラムへの意欲を高め、2 日間のプログラムに積極的に取り組むための心構えを築いた。

国際協力推進員による挨拶

吉成所長による開会挨拶

《　学校紹介・アイスブレイク　》

（1）ねらい

・学校紹介を通じて各校の特色や活動を発表し、参加者同士がそれぞれの学校への理解を深める。

・アイスブレイクを通じて参加者が緊張をほぐし、リラックスした雰囲気で交流を始めることで、参加者同士の距離を縮め、以降のプログラムに積極的に取り組むための土台を築く。

（2）概要

学校紹介では、各参加校がそれぞれの特色や活動について発表し、この取組みを通じて、参加者がそれぞれの学校を知る機会となり、交流をより活発にする基盤が築かれた。

アイスブレイクでは、参加者がリラックスし、円滑に交流を始められるよう、国際協力をテーマに取り入れたアクティビティを実施した。この活動により、異なる学校の生徒同士が自然に会話を交わすきっかけとなり、プログラムへの意欲を高めるとともに、互いの考えや視点を共有する場となった。

（3）参加者からの感想まとめ

・緊張しましたが、自己紹介や交流を通してリラックスできました。

初めは初対面の人と話すことに緊張していましたが、自己紹介やアイスブレイクを通じて、少しずつ打ち解けることができました。大勢の前での自己紹介は普段あまり経験することがないため不安もありましたが、決められたお題があったおかげで話しやすく、楽しく交流することができました。

・他校の生徒と交流し、新しい気づきを得ることができました。

異なる県や学校の生徒と交流する機会は少ないため、今回のプログラムを通じてさまざまな人と話すことができ、とても新鮮でした。アイスブレイクでは、自然と会話が生まれ、緊張もほぐれて楽しく過ごすことができました。また、他県の高校生と話すことで「九州内にも異文化がある」と感じ、新しい発見がありました。

・他校の特色や学校行事を知ることができ、新たな学びがありました。

各校が工夫を凝らした学校紹介をしていたため、他の学校のイベントや特色について詳しく知ることができました。学校紹介を聞く中で、「もっと自分の学校を PR できたかもしれない」と気づき、日頃から学校の魅力を整理しておくことの大切さを実感しました。また、スタッフの皆さんが明るく接してくださったおかげで、参加者同士の距離が縮まり、より交流しやすい雰囲気になったと感じました。

学校紹介

アイスブレイクの様子

発表を聴く参加者の様子

《　国際理解ワークショップ BafaBafa　》

（1）ねらい

・異文化に対する理解を深め、多様な価値観の存在を実感する。
・異なる行動様式や文化背景を持つ人々との円滑なコミュニケーション方法を考える。

（2）概要

BafaBafa（バファバファ）は、異文化理解を目的とした体験型ワークショップであり、参加者は架空の 2 つの国の住民となり、それぞれの文化の価値観や行動様式を体験しながら交流を行う。

このワークショップでは、参加者は対照的な文化を持つα国とβ国の 2 つのグループに分かれ、まずどちらかの国の文化の特徴や行動様式を学んだ後、もう一方の国に派遣され交流を試みることで、文化や行動様式の違いを直接体験する。その過程を通じて、異文化環境に適応する難しさを実感し、異なる価値観を理解し尊重することの重要性に気づくことを目的としている。

（3）参加者からの感想まとめ

・異文化を体験することで、相手を理解し尊重することの大切さを実感しました。

ワークショップを通じて、異文化に触れる際には、相手を知ろうとする姿勢や尊重する気持ちが重要であることを学びました。最初は、文化の違いに戸惑う場面もありましたが、自分が受け入れる側と受け入れられる側の両方の立場を体験することで、異文化交流の難しさや大切さを実感しました。また、海外の人が日本に住むことの大変さについても改めて考えさせられました。

・異文化交流の難しさと面白さを感じました。

ゲームのルールが独自のもので最初は理解するのが難しかったですが、実際に演じることで異文化を体感でき、とても楽しかったです。また、相手の国のルールを探る過程が推理ゲームのようでワクワクしながら取り組むことができました。異文化の違いを楽しみながら学ぶことができ、文化の違いを乗り越えて相手と関わることの大切さを実感しました。

・異文化に触れたときのリアルな感情を体験できました。

仮想の国同士の交流でしたが、何も知らない相手を目の前にすると、思わず無視してしまったり、逆に無視されて悲しくなったりと、異文化に触れたときのリアルな感情を実感することができました。また、全く異なる文化の人と関わることは楽しいだけでなく、ストレスを感じることもあることを学びました。この体験を通じて、異文化とどのように向き合い、関わっていけばよいのかを考えるきっかけになりました。

BafaBafa のルール説明

ワークショップの様子

ワークショップの振り返り

《　国際協力模擬体験　》

（1）ねらい

・JICA 海外協力隊の活動を疑似体験し、国際協力の課題解決のプロセスを学ぶ。
・異なる視点を持つ仲間と協力しながら、社会課題の本質を探り、持続可能な解決策を考える力を養う。
・考えを整理し、他者に分かりやすく伝えるプレゼンテーション能力を向上させる。

（2）概要

国際協力模擬体験では、モンゴルにおける JICA 海外協力隊への実際の要請課題を基に、観光、青少年活動、栄養士の 3 つのチームに分かれ、解決策を考える活動を行った。

まず、チームごとに与えられた課題の背景や現状を分析し、どのような社会的要因が影響しているのかを考えた。このプロセスでは、マインドマップを活用し、関連する情報を整理しながら、問題の本質を明確にした。異なる視点を持つメンバーと意見を交わすことで、より多角的な視点から課題を理解することができた。

その後、モンゴルに詳しい JICA 職員やゲストを交えたディスカッションを行い、現地のリアルな状況を踏まえた具体的な解決策を検討した。テーマ国に精通した方々の意見を聞くことで、より実践的で現実的な計画を立てることが可能となり、国際協力の現場で求められるアプローチを学ぶ貴重な機会となった。

計画がまとまった後は、模造紙を用いて発表に向けて、チームメンバーで役割分担を行い、発表内容の整理やプレゼンテーションの準備を進めた。

（3）参加者からの感想まとめ

・異なる価値観や考え方を学び、相手を尊重することの大切さを実感しました。

ディスカッションを通して、他校の生徒と意見を交わし、多様な価値観に触れることができました。自分とは異なる視点や考え方を知ることで、新しい発見が多くありました。また、相手の意見を受け止めながら進めることで、話し合いがスムーズに進むことを実感しました。

・課題の解決策を考えるのは難しかったですが、協力して取り組む楽しさを感じました。

最初は、テーマやルールを理解するのに時間がかかり、アイデアを出すのが難しかったですが、グループのメンバーと話し合ううちに、それぞれの視点から意見を出し合い、解決策を考えることができました。また、課題を深く調べていく中で、新たな疑問が生まれたり、最適な方法を考える難しさを実感したりしましたが、みんなで工夫して資料をまとめる過程がとても楽しかったです。

・他校の生徒と協力しながら進めることで、貴重な経験ができました。

他の学校の生徒と初めて一緒に作業をすることで、最初は、緊張や不安もありましたが、次第に協力しながら意見を出し合い、仲を深めることができました。また、実際にモンゴルに行った方の話を聞くことで、現地の課題をリアルに感じながら考えることができ、とても貴重な体験になりました。限られた時間の中で、どのように分かりやすく発表するかを考えながら進めることで、自分の意見を伝える力も身についたと感じます。最終的には、みんなで協力して目標を達成でき、とても充実した時間になりました。

国際協力模擬体験の説明

国際協力模擬体験ワークの様子

JICA 職員からヒアリング

《　JICA 研修員との交流会　》

（1）ねらい

・JICA 研修員との交流を通じて、異文化理解を深め、国際的な視野を養う。
・自分の意見を発信する機会を持ち、実践的で多様なコミュニケーションを図る。
・参加生徒同士でサポートし合いながら、研修員との対話を通じて、異文化間の相互理解を築く力を身につける。

（2）概要

北九州市の大学院に在籍している JICA 研修員 5 名（グアテマラ、パラグアイ、ホンジュラス、トンガ、ベトナム出身）を迎え、参加生徒が直接対話しながら学び合う機会を提供した。プログラムは、ゲーム要素を取り入れた研修員へのインタビュー、グループディスカッション、世界の食事を通じた交流など、多様なアクティビティで構成され、参加者が主体的に関わる形式で行われた。

研修員の母国の文化や価値観について直接話を聞くことで、異文化理解を深めるとともに、自分の意見を発信する実践的な英語でのコミュニケーションの機会を得た。また、参加生徒同士で協力しながら研修員との対話を進めることで、互いに助け合う姿勢を育み、異文化間の相互理解を深めることができた。さらに、食事を共にすることで、よりリラックスした雰囲気の中で親睦を深めることができた。交流を通じて、参加生徒は異文化への関心を高め、国際的な視野を持ち、今後の学びや活動に活かせるような経験を得ることができた。

（3）参加者からの感想まとめ

・海外の JICA 研修員と直接交流することで、異文化を知ることができました。

これまで海外の方と話す機会がほとんどなかったため、新鮮でとても楽しい経験になりました。自分がほとんど知らない国の研修員の方と直接話し、文化や価値観について学ぶことができました。また、食事の時間にも会話をすることで、ネットでは知ることができない現地のリアルな情報を聞くことができ、とても勉強になりました。異文化に触れることで、世界の多様性をより実感することができました。

・異文化コミュニケーションや言葉の面白さを感じることができました。

英語で話すことに緊張しましたが、少しでも理解しようと努力しながら会話をすることで、楽しい時間を過ごすことができました。英語のイントネーションが国によって異なり、聞き取るのが難しい場面もありましたが、グループで協力しながら話すことで、より深いコミュニケーションが取れました。また、英語だけでなく、スペイン語などの言語にも触れることができ、言葉の面白さを感じました。

・英語の大切さを実感し、今後の学習への意欲が高まりました。

実際に、海外の人と交流することで、自分の英語力に対する課題を見つけることができました。「もっと上手に話したい」「もっと英語を勉強しよう」と思うきっかけになり、これから英語を頑張るモチベーションになりました。また、言葉がすべてわからなくても、ジェスチャーや笑顔で楽しく交流できることを実感し、コミュニケーションの大切さを改めて学ぶことができました。

JICA 研修員の自己紹介

JICA 研修員へのインタビュー

世界の食事を囲んでの交流

ディスカッションの様子

JICA 研修員との集合写真

第２日目

7 月 26 日

《 国際協力模擬体験 グループ発表 》

（1）ねらい

・発表を通じて、自分の考えを分かりやすく整理し、伝える力を養う。
・質疑応答や意見交換を通じて、多様な視点からのフィードバックを受け、課題解決に向けた新たな気づきを得る。
・国際協力の実践における課題や持続可能な解決のポイントを理解し、今後の学びや行動につなげる。

（2）概要

国際協力模擬体験のグループ発表では、JICA 海外協力隊のモンゴルの要請課題を基に、観光、青少年活動、栄養士の 3 つの分野に分かれた各チームが、それぞれ考えた国際協力の課題解決のための活動計画を発表した。

まず、各グループが 7 分程度、課題とその解決策について発表し、その後、他の生徒や JICA 職員からの質問に答えた。JICA 職員からは、専門的かつ実践的な視点からの質問やアドバイスがあり、発表者は、国際協力の現場での課題解決のプロセスについて深く学ぶきっかけとなった。発表を通じて、チームごとに計画の要点を整理し、現実的な課題や実践的なアプローチへの理解を深める機会となった。また、他のチームの発表を聞くことで新たな発想を得るとともに、多様な視点から課題解決の方法を学ぶことができた。

発表後は、同じテーマのグループ同士で意見交換を行い、異なる視点やアプローチを比較しながら、自分たちの考えを見直す機会とした。振り返りでは、国際協力の実践における重要なポイントや、今後の学びや行動につなげるべき点を整理した。この活動を通じて、参加生徒は国際協力への理解を深める機会となった。

（3）参加者からの感想まとめ

・グループでの協力を通じて、多くの学びがありました。

短い時間の中で、初めて話すメンバーと意見を交換しながら準備を進めるのは大変でしたが、協力しながら発表内容を作り上げる過程がとても良い経験になりました。同じテーマでも、アプローチの仕方や解決策がグループごとに異なり、さまざまな視点から考えることの大切さを実感しました。

・発表を通じて、新たな気づきや課題を見つけることができました。

準備不足や情報不足で、伝えたいことを十分に伝えきれなかった部分が悔しかったですが、他のグループの発表を聞くことで、新たな視点や考え方を学ぶことができました。また、質疑応答では思いもよらない質問が出て、自分たちの考えに足りなかった視点を発見する機会になりました。

・発表の難しさを感じながらも、貴重な経験となりました。

発表では、緊張して噛んでしまったり、思うように話せなかったりしましたが、堂々と伝えようとする姿勢を大切にできたと思います。また、原稿なしで話すことの難しさを実感しましたが、自分の言葉で説明できたことに達成感を感じました。時間がもう少しあれば、より良いものが作れたかもしれませんが、短い時間の中で全力を尽くして準備し、グループの仲も深まったので、とても楽しい活動でした。

発表準備

グループ発表

発表後の振り返り

《 全体振り返り 》

（1）ねらい

・2 日間のプログラムを振り返り、学びを整理することで、今後の活動や国際協力への理解を深める。
・参加者が本プログラムで得た学びを持ち帰り、身近な環境での具体的な行動につなげる意識を高める。

（2）概要

全体振り返りの時間では、2 日間の活動を振り返りながら、参加者が学んだことや今後の行動につなげるための気づきを整理した。
まず、異文化交流や国際協力に対する考え方がどのように変わったかを共有し、それぞれの学びを深めた。次に、「Think globally, Act locally」（グローバルに考え、ローカルに行動する）という理念を共有し、地球規模の視点を持ちながら、自分の住む地域や身近な環境でどのような具体的ができるかを考えるワークを行った。
そのワークの中で、モンゴルの課題と日本の状況を対比することで、日本や自分の住んでいる地域にも様々な課題があることに気づき、今後どのような行動ができるかを考えるきっかけとなった。このプロセスを通じて、参加生徒は、今後の学習や活動に 2 日間のプログラムをどのように活かせるかを考え、自発的な行動につなげる意識を高めることができた。

（3）参加者からの感想まとめ

・異文化交流の大切さを実感し、視野を広げることができました。
　今回の体験を通じて、異文化交流の大切かを改めて実感しました。外国の方ともっと話せるようになりたいと感じたと同時に、日本と海外の課題を考える中で、異文化に対する理解が不足していることにも気づき、今後はより積極的に異文化交流を大切にしていきたいと思いました。

・課題解決の難しさを感じながらも、自分にできることを考える機会になりました。
モンゴルと日本の状況を考える中で、日本や自分の住んでいる県にも様々な課題があることに気づきました。九州の地域課題や教育に関する問題について深く考えることで、自分たちの身近な環境にも改善できる点が多くあると実感しました。また、グローバルな問題に対しても、自分にできる小さなことから始めることが大切だと感じ、今後は行動に移していきたいと思います。

・2 日間を通じて、充実した経験を得ることができました。
限られた時間の中で計画的に準備を進めることができ、時間の使い方や話し方の大切さを学ぶことができました。また、他校の人と協力しながら活動を進めることで、多くの意見を聞き、自分の考えをより深めることができました。今回の経験を通じて、海外に行ってみたいという気持ちが強くなり、新たな挑戦への意欲が湧きました。2 日間はとても充実しており、多くの人と関わることができ、本当に楽しかったです。

振り返りの様子

先生からの感想発表

生徒からの感想発表

《 閉会式 》

（1）ねらい

・閉会の挨拶を通じて、本プログラムの締め括りを行い、参加者の学びと成果を振り返る。
・プログラムで得た経験を今後の活動や学びへとつなげる意識を高め、プログラム参加者同士やスタッフとのつながりを大切にし、今後も国際協力への関心を持ち続ける契機とする。

（2）概要

閉会式では、JICA 九州の山口尚孝次長が挨拶を行い、プログラムへの参加に対する謝辞とともに、今後の学びや行動への期待を述べた。参加者は、2 日間の経験を振り返り、プログラムを通じて得た知識や気づきを今後の活動にどう活かしていくかを考える機会とした。

最後に、スタッフを含めた全員で記念写真を撮影し、プログラムの締め括りとした。

山口次長による閉会挨拶

集合写真

3．事後学習

事後学習

《 事後学習実践事例 》

2 日間のプログラムを終えた後、参加生徒の発表内容に対する JICA モンゴル事務所からのフィードバックを各学校の教員を通じて生徒に還元した。

また、2 日間のプログラムを通じて学んだことや、国際理解教育・開発教育の学びを継続するために、JICA 九州が提供する開発教育事業を活用して取り組みを行った学校がいくつかあった。学校ごとにそれぞれ事後学習が行われたが、以下は、JICA 九州の開発教育事業を取り入れた事後学習実践事例を中心に紹介する。

【 福岡県　福岡県立　久留米高等学校 】

久留米高等学校では、2024 年 12 月 5 日に、英語科の生徒約 40 名を対象に「出前講座」と「JICA 研修員との交流プログラム」を実施した。

出前講座では、JICA 海外協力隊の経験を持つ現職の高校教員が、ヨルダンでの派遣経験をもとに自身の体験談を語った。また、九州大学に在籍するタンザニアとウズベキスタン出身の JICA 研修員との交流プログラムも行われた。生徒たちは、日本との文化的な違や考え方の違いを学び、国際理解を深める機会となった。

出前講座の様子

タンザニア研修員の母国紹介

ウズベキスタン研修員の母国紹介

【 大分県　大分県立　大分舞鶴高等学校 】

参加生徒 4 名が学校の文化祭にて、「高校生国際協力実体験プログラム」への参加体験を発表した。発表では、プログラムを通じて学んだ異文化理解に対する重要性や気付きを共有し、他の生徒たちにも国際理解への関心を持ってもらう取組みとなった。

さらに、2024 年 10 月 23 日には、高校 2 年生約 300 名を対象に、オンライン形式で立命館アジア太平洋大学（APU）に在籍するベトナム研修員と「JICA 研修員との交流プログラム」を実施した。この取組みは、ベトナムを訪問する修学旅行の事前学習の一環として行われ、渡航前にベトナムの社会や文化に対する理解を深めることができた。

文化祭での発表の様子

オンラインでのベトナム研修員の母国紹介

【 佐賀県　佐賀龍谷学園　龍谷中学校・高等学校 】

参加生徒 4 名が中心となり、同学年の生徒を対象に異文化理解ワークショップ「BafaBafa」を実施した。学びを共有したいという思いから企画され、異文化共生への関心を深める機会となった。

また、引率教員の徳森千鶴先生は、2024 年度の「教師海外研修」でモンゴルを訪れ、その経験をもとに学校で授業を実践した。2025 年 1 月 25 日の授業実践報告会では、高校生国際協力実体験プログラムを含む国際理解教育の学校での取組みを発表した。これは、教員が JICA プログラムでの学びを生徒に還元し、教育の場で活かした実践例となった。

「教師海外研修」モンゴルでの研修の様子

教師海外研修 授業実践報告会・徳森先生の発表の様子

高校生国際協力実体験プログラムの取組みも紹介

3. 添付資料

《 参加校一覧 》

2024年度 高校生国際協力実体験プログラム 参加校一覧

	県	種別	高等学校名	1年	2年	3年	合計
1	福岡	県立	久留米高等学校	ー	1	3	4
2	佐賀	私立	佐賀龍谷学園 龍谷中学校・高等学校	4	ー	ー	4
3	長崎	私立	長崎南山学園 長崎南山中学校・高等学校	1	3	ー	4
4	熊本	私立	尚絅学園 尚絅中学校・尚絅高等学校	ー	ー	4	4
5	大分	県立	大分舞鶴高等学校	ー	4	ー	4
6	宮崎	県立	宮崎大宮高等学校	2	2	ー	4
7	鹿児島	私立	原田学園 鹿児島情報高等学校	1	3	ー	4
			合計(人)	8	13	7	28

《 スタッフ一覧 》

2024年度 高校生国際協力実体験プログラム スタッフ一覧

	所　属	氏　名	JICA 海外協力隊派遣国	職　種
1	福岡県 国際協力推進員	吉原 伸彦	ウガンダ	青少年活動
2	佐賀県 国際協力推進員	石川 洸	セネガル	村落開発普及員
3	長崎県 国際協力推進員	小田 智子	パラグアイ	音楽
4	熊本県 国際協力推進員	尾上 香織	トンガ	音楽
5	大分県 国際協力推進員	金谷 彩生	ガーナ	美容師
6	宮崎県 国際協力推進員	西村 真由美	—	—
7	鹿児島県 国際協力推進員	仮屋 慶一	モルディブ	体育
8	JICA 九州 市民参加協力課	戸崎 千尋	スリランカ	高齢者介護
9	NPO 九州海外協力協会	吉田 祐子	—	—
10	NPO 九州海外協力協会	原口 純一	—	—
11	NPO 九州海外協力協会	中本 勝也	イエメン	体操
12	NPO 九州海外協力協会	赤司 周平	ベナン	食用作物・稲作栽培
13	NPO 九州海外協力協会	宮原 良美	—	—
14	NPO 九州海外協力協会	山神 成正	—	—

《 募集要項 》

2024 年度 高校生国際協力実体験プログラム　募集要項

世界・仲間・自分、発見！

九州各地の高校生たちと
世界を感じる2日間！

JICA九州 高校生国際協力実体験プログラムは九州各県から集まった仲間が1泊2日を共にし、
世界と自分とのつながりを体感し、学び合う高校生のための国際協力入門講座です。

事前学習 6月下旬~7月上旬(予定)

●各校もしくはオンラインにて実施

「国際協力」ってなんだろう？

「実体験プログラム」への参加前に、各地の国際協力推進員と一緒に国際協力について考えてみよう

プログラム

DAY1（予定）	DAY2（予定）
11:00　開会式	国際協力模擬体験
アイスブレイク、自己紹介	昼休み
昼休み	グループ発表
国際協力模擬体験	振返り
JICA研修員との交流会	閉会式・写真撮影
終了	16:00　終了

事後学習 7月下旬～(予定)

●各校にて実施します

自分の変化を伝えよう！

「実体験プログラム」で感じたこと、考えたことを表現し、周りの人に伝えよう

プログラムはJICAボランティア経験者である
九州各県デスクの国際協力推進員たちがサポートします

JICAデスク 福岡
JICAデスク 佐賀
JICAデスク 長崎
JICAデスク 熊本
JICAデスク 大分
JICAデスク 宮崎
JICAデスク 鹿児島

問い合わせ先
(特活)九州海外協力協会 担当者
kaihatsukyoiku@npo-kyushu.or.jp
TEL:092-710-5310　FAX:092-710-5304

事前に知っておこう！

JICA（ジャイカ）とは？

JICA（国際協力機構）は、日本政府による開発途上国へのODA（政府開発援助）の中核を担う組織です

JICA海外協力隊って？

JICAが実施する海外ボランティア派遣制度です。開発途上国で現地の人たちと生活を共にし、貧困や環境など、その国の抱える課題に取り組みます

JICA九州とは？

JICAの九州における国際協力の拠点です。開発途上国から日本の技術を学びに来た人たちのための研修施設もあります

スケジュール

5/17㊎ 応募締切

6/14㊎ 合否通知（メールにて通知）

6月中旬～ :各種手続き

最寄駅・バス停、旅費振込口座情報、保険契約に必要となる引率教員・参加生徒の情報等を確認させていただきます。学校所在地からJICA九州までの往復交通費、宿泊費はJICA九州が負担します

6月下旬～7月上旬 :事前学習

九州各県デスクが各校で事前学習を実施します。日程調整等の詳細については、各県の国際協力推進員よりご連絡いたします

7/25㊍～26㊎ :プログラム当日

九州各県から集まった生徒と共に、左記プログラムを実施します。2日間全日程にご参加ください

7月下旬～ :事後学習

例年の参加校はプログラム終了後、学校行事や各地の国際協力・国際交流イベント等で、本プログラムの成果を発表しています。また、JICA九州が実施している開発教育/国際理解教育支援事業の活用や、各県JICAデスクとの連携も推奨しています

JICA九州 高校生国際協力実体験プログラム 2024

◆ グローバル人材を育てる参加型の「学び」

［世界を知る］ 世界の状況や国際協力の現状に気づき、理解を深める
［SDGsを学ぶ］ プログラムを通じ、理解を深め、自分たちが身近にできることを考える
［交　　流］ 参加者や協力隊経験者、JICA研修員との交流を通し、国際協力にどう関わることができるかを考える
［キャリア/生き方］ 様々な生き方・経験に触れることで自分自身を見つめなおし、将来の進路選択に役立てる

日程・会場

7月25日(木)～26日(金)
一泊二日

独立行政法人
国際協力機構 九州センター
（JICA九州） www.jica.go.jp/kyushu

福岡県北九州市八幡東区平野2-2-1
（JR鹿児島本線八幡駅下車徒歩10分）
TEL093-671-6311（代表）

参加条件

- SDGs・国際理解教育・持続可能な開発のための教育（ESD）・キャリア教育に積極的に取り組んでいる学校、又は今後取り組む意欲がある学校
- 教員・生徒とも、事前・事後学習を含み、全プログラムに参加可能なこと。選考後の参加者交代は不可
- 生徒の保護者より参加への同意が得られること
- 生徒が過去に本プログラムに参加していないこと
- 学校長より参加の許可が得られること

募集数

- 九州7県から7校(九州圏内の国公立、私立の高等学校)
  ※1校につき、教員1名、生徒4名での参加とします
  参加希望校が定数を超えた場合は、応募書類、県のバランス、新規希望校の優先等を考慮して選考します
- 最少開催人数:16名

留意事項

- プログラム参加費自体は無料となります
- 昼食および夕食代は各自でご負担ください
- 学校所在地からJICA九州までの往復交通費、宿泊費はJICA九州が負担します
- お車での来場はできません。公共交通機関をご利用ください
- プログラムへの参加に当たり、参加者全員、国内旅行傷害保険にご加入いただきます。同費用はJICA九州が負担します。万一事故が生じた場合、保険の給付範囲内で補償いたします
- 宿泊先はJICA九州宿泊棟となります
- 動きやすい衣服での参加をお願いします
- 個人都合(部活等)によるキャンセルはご遠慮ください
- 筆記用具、健康保険証の写し、および緊急時の連絡先をご持参ください

応募方法

右記QRコード又はURLから、JICA九州ホームページ内
高校生国際協力実体験プログラムのページをご確認いただき、
以下の手順でお申込みください。
[https://www.jica.go.jp/Resource/kyushu/enterprise/kaihatsu/jittaiken/index.html]

❶ 応募用紙をダウンロードし入力
❷ 応募フォームのリンクをクリックし、必要情報を入力後、応募用紙をアップロードして送信

応募締切　2024年5月17日(金)

2024年6月14日(金) 迄にメールにて合否通知

問合せ先
〒812-0025
福岡県福岡市博多区店屋町4-8 蝶和ビル503
（特活）九州海外協力協会
MAIL: kaihatsukyoiku@npo-kyushu.or.jp
TEL:092-710-5310 / FAX:092-710-5304

2023年度参加校実績

福岡県	新宮高等学校	熊本県	必由館高等学校	宮崎県	宮崎大宮高等学校
佐賀県	武雄高等学校	大分県	津久見高等学校	鹿児島県	鹿児島中央高等学校
長崎県	島原高等学校				

《 応募用紙 》

2024 年度 高校生国際協力実体験プログラム　応募用紙

JICA 九州高校生国際協力実体験プログラム応募用紙

高等学校名	立　　高等学校

＊次の質問にお答えください。

（1）本プログラムへの応募動機と目的、学びたいことや期待することをお書きください。

（2）貴校では既に国際理解教育/開発教育に関する取り組みをされていますか？
されている場合、取り組み内容や実績について教えてください。
（教員/学生/学校全体など、取り組み実施者の単位も併せて記載ください。）

（3）これまでに JICA の開発教育支援事業を活用されたことはありますか？
※活用されたことのある事業の□を■に塗りつぶし、詳細を本文に記載してください。
□国際協力出前講座　□センター訪問　□JICA 研修員との交流プログラム
□高校生国際協力実体験プログラム　□教師海外研修　□開発教育指導者研修
□国際協力中学生・高校生エッセイコンテスト

(4)本プログラム参加後について、学校内外(地域活動含む)で、どのような取り組みを予定されていますか？
(5)(過去に本プログラムに参加されたことのある学校のみお答えください。) プログラム参加後、開発教育/国際理解教育促進のために学校としてどのような取り組みをされてきましたか？

《 アンケートの集計結果 》

〈 参加生徒のアンケート（回答者数 28 名 / 28 名中）〉

1. 高校生国際協力実体験プログラムの 2 日間を通じての満足度

□とても良かった（満足）評価 5：28 名（全員）

理 由：

・様々な県や国の人が集まって意見を話すのが初めてでしたが、
今回の体験が壁を無くしてくれ、沢山話すことができ、とても充実した二日間だったからです。

・普段の生活では得られない知識や経験を得られたからです。

・異文化との関わり方を知ることができて良かったです。

・価値観の違いを見つけることができ良かったです。

・異文化との関わり方を知ることができました。

・異文化を体験できたことが楽しかったです。

・JICA について興味が深まり、もっともっと知りたくなりました。
これからの課題が明確になりました。どこの県もみんなほぼ同じ問題点を抱えていることがわかりました。

・他県の人と関わったり、他国の人と関わったことから、知らない環境に飛び込むことの楽しさ・　不安・発見を見つけることができました。

・「実体験プログラム」というだけあって、異文化や協力を肌で感じることができました。モンゴルについての知見が広まっただけでなく、もっと外国の人と話したり、様々な文化に触れたいと思いました。

・普段は高校や家という狭いコミュニティで暮らしているからこそ、九州各県から集まり、モンゴルという外国の課題について取り組むことがすごく新鮮で、難しいこともある中、自分の思考力・視点が深まり、広がったことで自信になったからです。

・今までどういうことをしないといけない、ということはわかっていても、実際体験して、気持ちまで考えることはできていませんでした。しかし、この実体験プログラムを通して、気持ちまで考えることができたからです。本当に貴重な経験が出来ました。

・国際協力にも沢山の形があり、行動に移すことの大切さがわかりました。九州内だけでも方言の違いがあって楽しかったです。貴重な経験ができました。

・他校と交流することで、九州内でも文化の違いや価値観の違い、抱えている課題を共有できて楽しかったです。

・協力隊としての経験のある方の意見も踏まえての計画作りができたので、実践的で、将来のビジョンが見えるようになったからです。

・自分とは違う環境の人でも繋がりあえ、昼の部では真面目に活動に取り組め、夜もビリヤードをでき、とても楽しかったです。

・どの体験においても新鮮なことばかりで、新しい発見に繋がって面白かったです。

・他校の人と仲良くなり、国際協力について深く考えることができたからです。

・自分の今の課題点や、課題解決の仕方を知ることができました。

・体験する前は緊張して上手く話せませんでしたが、他校の人、JICA の方、先生も優しかったので楽しむことができました。モンゴルのことにも詳しくなりました！
・異文化理解について、今回のプログラムに参加する前よりも、詳しく知ることができ、自分的に大きく成長できた 2 日間でした。
・外国の方と関わる機会が少ないので、良い経験になりました。
・このプログラムを通して異文化理解について考えるきっかけになり、他校の生徒と協力できたからです。
・最初はとても緊張していましたが、2 日間色んな人と話すことで、みんなと仲良くなれて良かったと思います。
・他県の人と仲良くなれ、多くの学びがあり、とにかく楽しかったです。満足です！
・この 2 日間だけで「初めて」を沢山経験でき、自分をさらにずっと成長させることができました。
・外国に行くのとはまた違う感覚で体験することができ、楽しかったです。
・短い間でしたが、結果、1 つのものにして、発表もできたので、とても満足できました。
・本当に本当に楽しかったです！自分を成長させる良い機会でした！ありがとうございました！

2. 2 日間のプログラムの中で一番印象に残ったことは何ですか。その理由も教えてください。

【国際理解ワークショップ BafaBafa】

・1 日目に行われたワークショップ BafaBafa が印象に残りました。楽しくゲームをしながら異文化交流を学ぶことができたからです。
・α国でのβ国住人の受け入れが印象に残りました。新鮮でリアルな体験をすることができました。
・1 日目のワークショップ BafaBafa です。今まで異文化交流というと、留学しか思いつかなかったけれど、日本人同士でもできるのだと感動しました。互いを理解し、尊重するのは簡単なようで難しいことを実感しました。
・BafaBafa です。2 国間のルールで言葉の違いを乗り越えることの難しさを知ることができました。また、最初は戸惑いましたが、楽しくなっていき、本当に異文化交流を体験したように感じました。
・BafaBafa で、異文化に触れることの大切さと今後もっと理解を深めていく重要性を学ぶことができました。また、人の行動や話していることをしっかり観察することが大切だと気づきました。
・BafaBafa です。自分は異文化を受け入れる側になったことがなく、受け入れる側もどうしたらよいか、わからなくなってしまうことに気が付くことができました。
・異文化体験アクティビティがとてもユニークなもので印象に残りました。
・自分の国以外の文化や常識で過ごしたことがなく、初めて会う人と気さくに話すことも難しかったですが楽しく、他の人と積極的に交流することを大事にしたいと思いました。

【国際協力模擬体験】

・国際協力模擬体験です。他県の人と一緒に考えて、意見交換も沢山できて、コミュニケーション能力が上がったと思いました。
・国際協力模擬体験です。班の人と協力でき、とても仲良くなれたので印象に残っています。
・他県の人と協力して行ったアクティビティが一番印象に残りました。すごく仲良くなれ、多くの学びがあったからです。
・モンゴルについての発表が印象に残りました。初めて会う人と違った考えを出し合うことが、こんなに楽しく思えたのは、この体験が初めてだったからです。
・協力隊の方の発表が印象に残りました。これまで全く関心がなかった栄養について調べることで、そこから興味のある貧困について結びつけられるのではと思いました。

【JICA 研修員との交流プログラム】

・JICA 研修員の方々と英語で話をしたことです。理解して一生懸命伝えようとできたからです。
・英会話でイントネーションが違うなどして難しかったです。
・JICA 研修員の方とご飯を食べたことです。多くのことを知ることができました。
・各国のご飯。
・JICA 研修員との交流です。
・海外の方との交流です！英語で話すことの大切さ、難しさを感じることができました。

【国際協力模擬隊体験 グループ発表】

・プレゼンが難しかったことです。
・発表で生徒も質問をしていて、自分で考え、疑問を持っていてすごいなと思いました。
・発表の準備時間です。高校生の年上の人ばかりで、新しい発見に繋がって面白かったです。
・発表と他校の人との関わりです。こんなに仲良くなれると思っておらず、発表も良いものにすることができたからです。
・モンゴルについて調べて、各グループで発表したことです。楽しかったのと、学びを深めることができたからです。
・グループ発表が印象に残りました。発表は苦手なので、約 1 日の準備だけで不安でしたが、グループの人と総仕上げして、無事に発表できました。

【その他】

・同じ目標・温度差を持った人と行動でき、世界へ向かう準備をすることが今までになかったため、とても良い経験になりました。学校とは違い、意欲的な方が多くて、感動しました。他校の方とビリヤードをしたことも、とてもいい思い出になりました。
・食事が印象に残りました。見たことも食べたこともないメニューを知り、味わうことができて海外を味わうことができました。ボリュームも海外な感じで非日常でした。
・相手の意見を否定するのではなく、付け加えるということ。
・①プレゼン：一番時間もかけて、一生懸命になれました。②色んな国のご飯：知らない食べ物もあって、とても美味しかったです。③海外の方とのディスカッション

3. 今後、学校や個人でどのようなことに取り組みたいですか。

・地域のコミュニティ等の、まずは小さい規模から課題を見つけて、取り組みたいです。
・私達の学校では地域コミュニティの低下、伝統芸能や強度領地の衰退等を課題として改善していきたいです。
・学校に帰り、今回の活動を周りの人に教えます。
・人々のニーズを解決していきたいです。
・人種差別の問題に取り組みたいです。
・今回の活動を中学生に発信します。
・①SSH の発表に使えること（目線・話し方）を学ぶことができたので、使いたいと思います。②夏休みの学童ボランティアで、教育格差の解決策を実行し、2 学期以降の自分のためになるようにします。③JICA についてもっと知り、仕事の内容等、深く調べます。
・①今回学んだことを身近な課題解決への取り組みとして、世界から日本、日本から大分、大分から地元に課題を落とし込み、活かしたいと思います。②文化祭で今回の体験をみんなに発表しようと思います。

・今日考えた課題や解決策を実行し、日々の生活の中でも GLOCAL を意識して自分にできることを探していきたいです。
・積極的に話します。自分も相手も尊重することを大事にしたいです。
・物事を考える時は、今回学んだ考え方を生かしたいです。また、自分から積極的に色々なイベントに参加していきたいと思います。英語力を上げていきたいです。
・思ったことがあった時や課題を見つけた時は、意見を交わし、行動に移します！
・今回学んだ内容を具体化し、モンゴルのような今まであまり関わってこなかった国の課題についても深く知っていきたいです。
・国際開発、異文化理解に携わる仕事をしたいです。
・振り返りの中で今後自分達ができる取り組みを考えることができて、コミュニティをもっと佐賀で増やしていくために、ボランティアに積極的に参加したいです。
・BafaBafa を学校でも設定を変えて行いたいです。
・世界で困っていることに少しでも貢献できるように周りをよく見て、沢山のことに取り組みたいです。困りごとになっている課題に取り組んで行きたいです。
・話し合って意見を出し合う時、否定せずに自分も沢山意見を言うことです。
・地域の課題を解決します！
・自分が住んでいる県について、今回のモンゴルのように課題を考えたり、自分にできることを考えたりしていきたいです。
・今回の活動で国際協力について理解を深めることができたので、学校の集会等で伝えていきたいと思いました。
・今回学んだことをパワーポイント等にまとめて発表したいです。最後の振り返りで考えたことを実践します。
・身の回りの課題が見つかったので、学校を巻き込んで解決したいです。
・地域の課題を解決したいです！英語力を上げたいです。
・高文祭でしっかりと発表します！
・BafaBafa のアクティビティを広めていきたいです。
・もっと英語に触れるために、留学や JICA の各国の事務所を訪問してみたいです。

〈 参加教員のアンケート（回答者数 7 名 /7 名中）〉

1. 本プログラムを何で知りましたか。（複数選択可）

□ 学校に送られてきた案内：4 名
□ メールでの案内：1 名
□ JICA 九州 HP：2 名
□ 国際協力推進員に聞いた：1 名
□ 知人に聞いた：0 名
□ 回答なし：1 名

2. 高校生国際協力実体験プログラムの 2 日間を通じての満足度

□ とても良かった（満足）評価 5：6 名

理由：

・よく考えられたプログラムであり、スタッフの皆様の熱意を感じました。
・成長がとても嬉しかったです。他校との意見交換で相手を受け入れることの大切さを学んだようです。
・2 日間の大変充実した時間を過ごせました。少しずつ慣れてきて積極性が出てきたようで安心しました。
・「実体験」する機会が持てました。学校でも探究活動や国際理解教育を行っているので、それともっとうまく連携できたら良かったと思います（個人的反省です）。食事や衣装など「実体験」できる雰囲気を作っていただき、ありがとうございました。
・2 回目の参加！さらに大満足でした！
・大変皆さんのおかげで充実した 2 日間のプログラムでした。ありがとうございます。

□良かった 評価 4：1 名

理由：

・生徒達がずっと活動できる内容であった。

3. 全体の流れ、時間配分は適切でしたか。

□適切だった：6 名

理由：

・高校生は固定した休み時間が必要かもしれません。
・長すぎず、緊張した雰囲気で取り組むことができました。
・内容が濃い分、ぎゅっとしたスケジュールでした。全体の時間を考えると仕方ないところもあるので、難しいですね。
・昼食の時間にずれ込んでしまったのは残念でした。
・少し昼食がバタついた雰囲気でした。
・アイスブレイク→BafaBafa→アクティビティがあって、コンパクトにきちんと設計されていたと思います。

□適切ではなかった：1 名

・良い内容であったが、時間の余裕がありませんでした。

4. 今後、事後学習として取り組みたいこと、生徒の皆さんと進めていきたいことをご記入ください。

・その他の生徒とも共有するため、活動プレゼンを行わせたいです。

・BafaBafa を参加生徒主体で実践します。校内外のプログラムで発表していきます。

・中学生を対象に今回の内容を発表してもらう予定です。

・校内（クラス）での参加内容の紹介を行う予定です。

・文化祭での発表。他の生徒達とも体験プログラムをしてみたいと思います。

・校内で推進員とともに BafaBafa や出前授業等。

・国際ボランティア部で BafaBafa をしてみたいです。

5. JICA の開発教育 / 国際理解教育に関する教育支援に対してどのようなことを期待しますか。

・本校が 1 年次に English Camp を行っているため、English Camp のような形で、異文化理解のイベントがあればありがたいです。

・年 1 回でも大変だと思いますが、冬の部もあるとうれしいですし、実際の協力隊（現地隊員）とのやりとり（今回だったらモンゴル）や、現地の子ども（生徒）との交流、文化体験があるとより身近に感じられると思いました。

・3 月にある進路相談会や探究活動の中で、ワークショップ等を行ってほしいです。

・現在は学校単位での取り組みが軸になっているように感じました（他にもされていると思いますが）。社会教育としての取り組みもあると、参加者が利用しやすいかもしれません。

・学校現場をいろいろ気遣っていただき、ありがとうございます。今後もよろしくお願いします。

・特になし。

・海外研修の事前学習として JICA の要素を取り入れたいと思いました。

以上

2024年度（令和６年度）
JICA九州　高校生国際協力実体験プログラム
発行 2025年３月

【発行者】
独立行政法人国際協力機構　九州センター（JICA九州）
〒805-8505 福岡県北九州市八幡東区平野 2-2-1　TEL 093-671-6311
https://www.jica.go.jp/kyushu/

【事業受託者】
特定非営利活動法人　九州海外協力協会
〒805-8505 福岡県北九州市八幡東区平野 2-2-1（JICA九州内）
TEL 093-671-8678